

# 日本英文学会 北海道支部

## 第 68 回大会プログラム

日時：令和 5 年 10 月 29 日(日)

会場：藤女子大学北 1 6 条キャンパス（札幌市北区北 1 6 条西 2 丁目）

※ 新型コロナウイルスの感染状況によっては、予防対策および感染防止のため開催形式を変更する可能性があります。その場合には、下記の北海道支部ウェブサイトにて、また支部会員の皆様にはメールにてご連絡させていただきます。

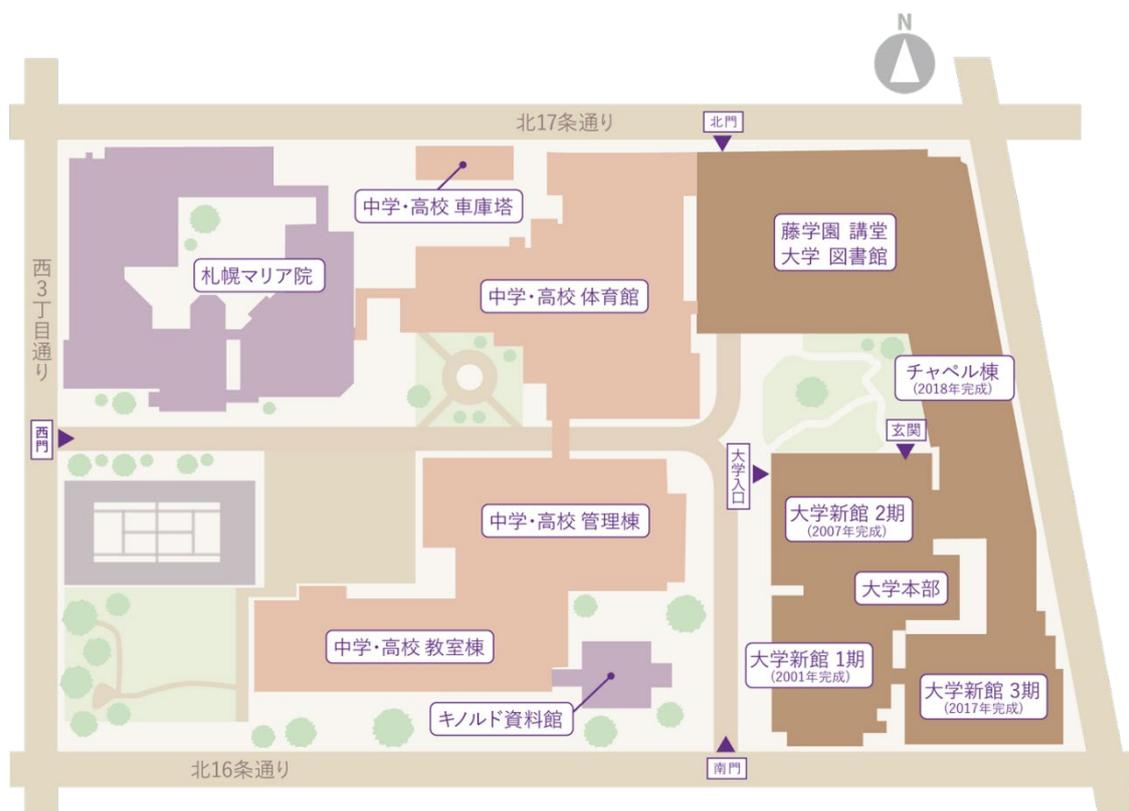
北海道支部ウェブサイト：<http://www.elsj.org/hokkaido/index.html>

〈会場アクセス・地図〉

- 地下鉄南北線『北 18 条』駅下車、徒歩 5 分
- 地下鉄東豊線『北 13 条東』駅下車、徒歩 10 分
- 中央バス 花川団地線(14)または石狩線(30)石狩方面行き「北 15 西 1」下車、徒歩 2 分



キャンパス配置図



<懇親会のご案内>

日時: 10月29日(日)18:30~20:30

場所: osteria EST EST EST

(札幌市北区北9条西2丁目 ホワイトキューブ札幌 1F、011-746-3389)

会費: 一般会費 5,000 円、学生会費 3,500 円

<その他>

\*懇親会参加希望の方は、10月25日(火)までに、下記のフォームにてお申し込みください。

<https://forms.gle/Wnv64JSTACpzYCnc8>

\*昼食につきましては、大学から徒歩3~4分圏内にコンビニエンスストアがございます。

\*書籍展示はございません。

\*発表者・参加者控室 474 教室

# 日本英文学会北海道支部第 68 回大会プログラム

日時:令和 5 年 10 月 29 日(日)

会場: 藤女子大学北 1 6 条キャンパス

(札幌市北区北 1 6 条西 2 丁目)

受付開始 (9:40~) (新棟 4 階エレベーター・ホール)

開会式 (10:05~) (471 教室)

開会の辞 日本英文学会北海道支部支部長 奥 聡

理事会 (12:40~) (474 教室)

<文学部門> (471 教室)

研究発表 (10:20-12:05)

1. (10:20-10:55)

司会 北海学園大学 上村 仁 司

メドゥーサ神話を用いた分析で『パドヴァ大公妃』の女性嫌悪を明らかにする試み

北海道教育大学札幌校 本間 里美

2. (10:55-11:30)

司会 酪農学園大学 藤田 佳也

観察対象としての「影」

—ジョン・ミリントン・シングの「山中の秋夜」における見ちがい

北海道大学大学院 江刺 佳紘

3. (11:30-12:05)

司会 札幌市立大学 松井 美穂

死を通して生を認識すること

—E. A. Poe “The Premature Burial” における死者の能動性

北海道大学大学院 白木 涼花

<休憩>

招聘発表 (13:30-14:20)

司会 北海道教育大学函館校 星野立子  
A. E. ハウスマンと新しい時代の作曲家たち  
Studio26 音楽企画代表、北海道教育大学名誉教授 本堂知彦

シンポジウム (14:45-17:15)

21世紀に異性装を再考する

司会・講師 藤女子大学 大桃陶子  
講師 北海道教育大学旭川校 十枝内康隆  
講師 和光大学 宮崎かすみ

<語学部門> (473 教室)

研究発表 (10:20-12:05)

司会 藤女子大学 對馬康博

1. (10:20-10:55)

コーパスに基づく be willing to の語法研究

北海道大学大学院 池田拓誉

2. (10:55-11:30)

SOV 言語と SVO 言語の根源的基盤

札幌大学 濱田英人

招聘発表 (11:30-12:05)

司会 北海道教育大学札幌校 佐藤亮輔  
英語の非制限関係節について—主節か、それとも従属節か  
北見工業大学 戸澤隆広

<休憩>

セミナー (13:30-14:30)

司会 札幌学院大学 眞田敬介  
「モノがコトに包まれる「場」のある世界」と「モノだけから成る「場」のない世界」  
— 一日英語の「絵本」・「映画ポスター」の違いにもふれて—  
北海道武蔵女子短期大学名誉教授 尾野治彦

シンポジウム (14:40-17:40)

文法とレトリックのせめぎあい—認知・構文・比喻—

司会・講師	札幌学院大学	山添 秀剛
講師	就実大学	小田 希望
講師	大阪市立大学 (現大阪公立大学) 名誉教授	瀬戸 賢一

総会・閉会式 (17:45～) (471 教室)

閉会の辞 日本英文学会北海道支部副支部長 野村 益寛

懇親会 (18:30-20:30)

場所 : osteria EST EST EST

(札幌市北区北9条西2丁目 ホワイトキューブ札幌 1F、011-746-3389)

## <発表要旨>

### <文学部門：研究発表>

メドゥーサ神話を用いた分析で『パドヴァ大公妃』の女性嫌悪を明らかにする試み

本間 里美（北海道教育大学札幌校）

本発表ではメドゥーサ神話を介して、『パドヴァ大公妃』（1883年）に潜む女性嫌悪の解明を試みる。『サロメ』（フランス語版1893年、英語版1894年）など数多くのオスカー・ワイルド作品が、性的倒錯、男性同性愛の観点から盛んに研究されてきた。しかし、ワイルドの初期作品のひとつである『パドヴァ大公妃』は、未だそれらの観点から十分に論じられているとは言えない。『パドヴァ大公妃』は、後のワイルド作品に継承される性的倒錯、男性同性愛、女性嫌悪の要素がふんだんに盛り込まれた作品であり、巧妙に隠されたこれらの要素を読み解くことは、ワイルド作品全体の流れをつかむ上で重要なピースになると考える。性的倒錯を表すモチーフとして様々な芸術家に用いられてきたメドゥーサ神話は、『パドヴァ大公妃』全体を貫くコードであり、この神話を用いた分析により、効果的に作品に潜む女性嫌悪を表出させる。

#### 観察対象としての「影」

—ジョン・ミリントン・シングの「山中の秋夜」における見ちがい

江刺 佳紘（北海道大学大学院）

J. M. シングの「山中の秋夜」（1903）では、複数のレベルでの取り違いと死が関係づけられて書かれている。たとえば、ある男は、雨の降る夜の谷間で犬を兎と間違えて撃ったのち、殺してしまったという早とちりによって、負傷した犬をそのまま置き去りにしてしまう。致命的な見誤りは、超常現象によって死んだとされる別の犬や、語り手が小屋を訪れる数日前に亡くなったとされるメアリ・キンセラの挿話と連続するよう思われる。本発表はウィックローで起こる複数の事故と、それを連絡する人々の語り注意到払いながら、最終文で語り手が見るメアリ・キンセラの死体の入った「棺の影」を観察する。このとき、『谷の蔭』（執筆1902、初演1903）や『海に騎りゆく者たち』（執筆1902、初演1904）においても、見ちがいと死が描かれていることにも触れながら、シングが「影」のような対象を観察することの困難を主張しつつも、その観察方法を探求した可能性について論じる。

## 死を通して生を認識すること

### —E. A. Poe “The Premature Burial” における死者の能動性

白木 涼花（北海道大学大学院）

生き埋めの恐怖を描いたエドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe, 1809-1849）の短編「早すぎた埋葬」（“The Premature Burial,” 1844）において、従来の研究では語り手はセンセーショナルな話題を消費的に楽しむ存在すなわち「読者」と同一視されてきた。しかし、自身の感じる恐怖を語る構成の巧妙さは、むしろ語り手が「書き手」としての能動的な役割を果たしていることを示しているといえよう。本発表では、本来受動的であるはずの生き埋め状態にある者たちと、能動的な存在としての語り手との間の鏡像関係を明らかにすることで、生そのものではなく、死という鏡像を通して生を認識しようとしたポーの試みについて考察する。ポーが繰り返し描いた重要なテーマを最も直接的に扱った作品の一つであるにもかかわらずこれまであまり評価されてこなかった本作が、生死の境界を巡る彼のユニークな認識を理解するうえで重要な作品である可能性を示したい。

### <文学部門：招聘発表>

#### A. E. ハウスマンと新しい時代の作曲家たち

本堂 知彦（Studio26 音楽企画代表、北海道教育大学名誉教授）

1642年に革命に勝利したピューリタンの人々が劇場を閉鎖して以来、イギリスは文化的後進国となり、王政復古後も音楽文化はもっぱら外来の作曲家や演奏家の手に委ねることとなった。そのような状況からようやく脱却する契機となったのが、19世紀後半におけるエルガーの登場である。エルガー以後、イギリスに次々と優れた若い世代の作曲家たちが歌曲のテキストとして好んで取り上げたのが A. E. ハウスマンの『シュロップシャーの若者（A Shropshire Lad）』であった。『シュロップシャーの若者』は、折りしも勃発した第一次世界大戦の悲惨な記憶と結びつき読み継がれ、また歌い継がれることとなった。なぜ新しい世代の作曲家たちは『シュロップシャーの若者』を取り上げたのか。ここではハウスマンの詩論や当時の社会情勢から『シュロップシャーの若者』の特異性を考察し、さらには作曲家たちが作曲した例を比較しながら、この詩集の持つ魅力を掘り下げていきたい。

## <文学部門：シンポジウム>

### 21世紀に異性装を再考する

司会・講師	大 桃 陶 子（藤女子大学）
講師	宮 崎 かすみ（和光大学）
講師	十枝内 康隆（北海道教育大学旭川校）

19世紀の性科学者や精神科医たちは、異性装は精神異常の兆候や性的倒錯の一種であるという前提に立ち、この行為を特に同性愛と結びつけて議論を重ねていた。しかしその後のジェンダー研究の発展を受け、異性装は必ずしも同性愛の一側面などではなく、むしろ社会や文化の産物であるとして史学的な立場から論じられるようになっていく。

一方で近年のファッション業界においては、ユニセックスや男物のスカートなど、異性装という概念そのものを覆すような潮流が起こりつつある。そこで本発表では、セクシャル・オリエンテーションとは切り離されたより風通しの良いジェンダー・エクスペリメンテーションとしての異性装の可能性を追求したい。そして、今回のシンポジウムを通じて、改めて異性装がイギリス文学においてどのように扱われてきたかについて、特に衣服の性差が明確に区別されていたヴィクトリア朝から20世紀にかけてのテキストを中心に振り返りたい。

#### ステラとファニーのうるわしき仮面の秘密

##### — 19世紀後半のロンドンのアーケードを彩った女装者たち

宮崎 かすみ（和光大学）

ワイルド裁判よりもほぼ一世代前に、ロンドンを賑わしたセンセーショナルな女装者たちが繰り広げた、通称ステラ&ファニー事件を本報告では扱う。

この事件は、Ernest Boulton（女性名 Stella）と Frederick Park（女性名 Fanny）という女装した若者二人が、1870年4月にストランド劇場から出てきたところを逮捕されたことに端を発した。当初の罪状は、若者のグループを従え、女装してロンドンのウェスト・エンドを練り歩いた二人が、公序良俗を乱したというものだった。二人の審理が始まるや大勢の野次馬や報道陣が詰めかけ、この事件の報道が連日、新聞・雑誌の紙面を賑わせた。さらに警察によって家宅搜索された彼らの住まいから大量の婦人服、宝飾品なども押収され、騒然となった。捜査の進展につれて、彼らの罪状にはソドミーも加えられたが、結局証拠不十分により無罪となった。

19世紀の男性が女性に変貌するための努力・工夫も含めてこの事件を具体的に紹介し、そこから異性装とソドミー（同性愛）の関連性についても明らかにしたい。

## 異性装とエロティシズム

十枝内 康隆（北海道教育大学）

「服飾倒錯（トランスヴェスティズム）」という表現が内包する病理学的で差別的なニュアンスを脱するべく、「異性装（クロス・ドレッシング）」という言葉が使われるようになって久しい。だがトランス・ポリティクスの進展とともに「異性装」という概念が普及する過程において、積極的に性的な境界を越境し侵犯する冒険的な試みが肯定されるようになった一方で、性的境界の攪乱に伴うエロティックな快楽や、服飾フェティシズムをめぐる愉悦に関しては却って抑圧されるようになった憾みがある。本発表においては、ヴィクトリア朝からエドワード朝にかけての、探偵小説からエロティック文学にいたる幅広いジャンルのフィクションから出発して、英国の文学、美術、そしてファッションにおける異性装とエロティシズムの際どくも妖しく魅力的な関係に迫ってみたい。

## 異性装とオリエント

大桃 陶子（藤女子大学）

本発表では、異性装という行為を比較的容易にする場としての東洋およびオリエンタル・ファッションについて考察する。具体的には、ヨーロッパ人がオリエントの地で異性装という行為に及んだとき、またはオリエンタルなデザインが異性装に組み込まれたときに何が起きているのかを議論していく。

エリザベス・ギヤスケルやラドヤード・キプリング、ヴァージニア・ウルフ等のテキストにおける異性装の描写を通じて明らかになるのは、以下のような傾向である。ヨーロッパ人男性はオリエントの地での異性装を通じて、故国では抑圧されていた欲望を解放する。一方でヨーロッパ人女性はオリエントの地での、もしくはオリエンタル風の異性装を通じて、同胞の男性と対等の存在であることを主張する。オリエンタル風の男装については、ココ・シャネルと同じく女性をコルセットから解放したファッションデザイナーであるポール・ポワレの影響に着目していきたい。

## < 語学部門 : 研究発表 >

### コーパスに基づく be willing to の語法研究

池田 拓誉 (北海道大学大学院)

日本で刊行された語学書 (例: クラフト 2016: 174) や辞書 (例: ジーニアス英和辞典第6版) には be willing to の意味には「自ら進んで(喜んで)~する」という<積極性>はないと指摘するものがある。また、be willing to に関する先行研究である衛藤 (2019) でも、意味論的立場から文主語の意志に<積極性>が認められない点が指摘されている。一方、willing が叙述用法ではなく、限定用法として用いられる場合は、<積極性>を表す意味になることは一般に認められている (例: a willing helper)。叙述用法の場合にも willing が<積極性>を持つ場合はないのだろうか。本発表では COCA を用いて、be willing to と共起する形容詞・副詞・動詞について調べた。その結果をもとに be willing to が共起する語の意味が<積極性>を含む場合には積極的な意味で用いられることを主張する。

### SOV 言語と SVO 言語の根源的基盤

濱田 英人 (札幌大学)

原型言語の語順が SOV であり、その後 SVO へと変化したことは Givón (1979) など多くの研究で指摘されている。本発表では、日本語と英語を取り上げ、この語順の違いを言語話者の事象認識の違いから考察する。具体的には、SOV の言語話者は知覚と認識が融合した認知であり、見えのままを認識するのに対して、SVO の言語話者は知覚と認識が分離した概念世界で事象を関係概念として認識し、その参与者をトラジェクター / ランドマーク認知で捉えるという違いが、両言語の語順の違いの根柢にあることを主張する。

本発表では、この主張が SVO という語順が確立している英語話者の子供でも主語が欠落している場合に OV となる事例 (Koizumi (2002)) からも支持が得られること、また、知覚と認識の融合と分離という認知のあり様の違いから SOV / SVO を考察することで言語の能格性 / 対格性をより自然に捉えることができることを述べる。

## < 語学部門：招聘発表 >

英語の非制限関係節について—主節か、それとも従属節か

戸澤 隆広（北見工業大学）

従来、非制限関係節(例：I telephoned Rod, who had called while I was out.)は主に二つの分析がされてきた。一つは非制限関係節が先行詞に付加し、先行詞と構成素をなす分析で、これを従属節分析と呼ぶ(Jackendoff(1977))。もう一つは非制限関係節が先行詞と構成素をなさず、独立した文を形成する分析で、これを主節分析と呼ぶ(Ross (1986))。これら二つの分析には経験的証拠があり、何れの分析が優れているかについて活発に議論されてきた。本発表では、第三の分析として Sideward Merge/Parallel Merge 分析を提案する。本分析では、非制限関係節が先行詞と Sideward pair-Merge/Parallel pair-Merge することで、非制限関係節が独立した文を形成する。これにより、従属節分析を支持する事実と主節分析を支持する事実の両方に説明が与えられることを示す。また、最近の極小主義プログラムで、Chomsky (2019)は Sideward Merge/Parallel Merge を文法操作から破棄している。これについて、本発表では Merge を set-Merge と pair-Merge に分け、pair-Merge の場合には Sideward Merge/Parallel Merge が認められると示唆する。

## <語学部門：セミナー>

「モノがコトに包まれる「場」のある世界」と「モノだけから成る「場」のない世界」—日英語の「絵本」・「映画ポスター」の違いにもふれて—

尾野 治彦（北海道武蔵女子短期大学名誉教授）

本発表では、「場」の有無の観点から、日本語・英語と両言語に基づく日本文化・英米文化の違いを探る。

「場」があるとは、現実の時空間のある世界にいるということであり、この観点から、小説や（画像が関わらない）絵本を基に、「時」「場所」「背景」表現についての日本語と英語の対応表現を比較し、表現の違いには「場」の有無が関わっていることを指摘する。次に、絵本の画像に対する日英語表現の〈言語化〉と映画ポスターの日本語版と英語版の〈画像化〉の対比をし、〈言語化〉と〈画像化〉については共通点があることを示し、日英語の認知様式とモノ、コトの扱いについての一般化を試みる。

このモノ、コトについての一般化は、言語面のみならず、スポーツ、社会生活・日常生活や美の捉え方等の文化面にも及んでおり、結論として、これらの違いは、「モノがコトに包まれる「場」のある世界」と「モノだけから成る「場」のない世界」としてまとめられることを指摘したい。

## <語学部門：シンポジウム>

文法とレトリックのせめぎあい—認知・構文・比喩—

司会 講師	山 添 秀 剛（札幌学院大学）
講師	小 田 希 望（就実大学）
講師	瀬 戸 賢 一（大阪市立大学（現大阪公立大学）名誉教授）

ことばには、規則の体系としての〈文法〉的な側面と、効果的な伝達およびそれを支える創造的な認識としての〈レトリック〉的な側面がある。本シンポジウムの3つの研究発表では、研究対象の力点は認知・構文・比喩と違えど、ことばにおける文法とレトリックの働きに注目する。味ことばの背景にはどのような比喩的な認識があり、日英語で異同があるのか？リピティション（反復法）は形式と意味の統合体たる構文の観点からどのように考えられるのか？ 主役メタファーの脇役とされがちなシミリーの存在価値とは何なのか？ それぞれの問題意識には、ことばと切っても切れない文法とレトリックの関係が通底する。本シンポジウムは、ことばにおいて文法とレトリックの役割や力関係を、言語表現 vs.世界認知，形式 vs.意味，字義 vs.比喩，シミリーvs.メタファーなどの対立から考察する。

山添 秀剛 (札幌学院大学)

本発表の目的は、日英語話者が「味をどのように捉えるのか」を比較・考察することにある。味はたんに味覚専門のことばだけでは語られない、つまり日本語の「味ことば」の多様性が、瀬戸 (編著) (2003) や瀬戸ほか (2005) で示された。しかし意外にも、その多様性を支える「味の認識」に関する直接的な研究は寡聞にして知らない。例えば、概念メタファー理論では、*x is food* と理解の素材〈起点領域〉に食に関する概念が含まれる研究はあっても、*taste is y* と理解の対象〈目標領域〉に味概念が現れる概念メタファー分析は見ない。この分野にかかわる研究に共感覚表現があるが、仮に一方向仮説に従えば、原感覚の味覚は、共感覚としての触覚を通じてしか理解されない (cf. *taste is touch*)。この分野に最も切り込んだ研究は辻本 (2003, 2005) や瀬戸 (2003) であるが、日本語のみの分析で概念メタファー分析も十分な全体像を描けていない。本発表では、日英語話者の味の捉え方を、概念メタファーを用いて明らかにする。

XX 構文の多義構造—形容詞を中心に—

小田 希望 (就実大学)

‘You make the fruit salad, and I’ll make the *salad-salad*.’の *salad-salad* は、グリーンサラダのような典型的なサラダを意味する。このような繰り返し表現はレトリックでは反復法 (repetition) に分類されるが、単語の意味を単純に足し算しただけでは解釈できない。名詞だけでなく複数の品詞で観察されるこの繰り返し表現は、一定の形式と意味がセットとなった構文と考えられるため、本発表では XX 構文と呼ぶ。先行研究では、XX 構文は上記のプロトタイプの意味を含めて複数の意味を持つとされる (Ghomeshi, et al. 2004; Horn 2006, 2019; Hohenhaus 2004; Benjamin 2018)。しかし、管見の限り、構文としての多義を認め、その多義構造を明らかにしようとするものはみられない。そこで本発表では、4つの意味を確認した上で、形容詞を中心に XX 構文が持つ多義構造を明らかにしたい。

## シミリーはメタファーの下僕ではない

瀬戸 賢一（大阪市立大学（現大阪公立大学）名誉教授）

シミリーは、一般にメタファーの陰に隠れて真剣な扱いを受けず、しばしばメタファーの一種（弛緩形）で済まされてきた。しかしシミリーには独自の役割があり、簡略に定義すれば、AとBの間に意外な類似点を発見し、それを提案し、よってAの意味（のある側面）を明らかにする比喩だといえよう。新鮮な驚きを伝えることを主眼とし、形式的には「AはBのようだ」などと言いきって、しばしばどの点で似ているのかも明示する。そのためAとBは実際にはあまり似ている必要はなく、かけ離れているほうがかえっておもしろい。自由奔放に駆け回るのがシミリーの魅力の核心であり、奇想天外な、前代未聞の比喩はシミリーのプレーグラウンドだ。メタファーと対比するなら、シミリーは比喩の新天地開拓を目指し、メタファーはおおむね既知の比喩の深掘りを志向するとまとめられる。両者の動的な関係と言語一般との関係も実証的に解明したい。